

娯楽としての悪癖—「飲む・打つ・買う」の文化的社会的研究

Bad Habits as Entertainments

総括研究員：桂川光正

分担研究員：藤原康晴 原田一美 倉橋幸彦 村田好哉 藤永 壮

〔総括〕

今後の研究を、ほぼ以下のような方向で進めることにした。

まず、都市化が進み大衆社会が成立するにつれて「悪癖」に対する人々の考え方や国家の政策等がどのように変わっていったのかを検証してみる。ついで、そこから「悪癖」の社会的意味・機能について考える。そして、その意味・機能の変化を通して、「『近代』とは何か」という問題を考えていく。

〔95年度報告テーマとその要旨〕

・桂川光正「原内閣と阿片政策」

原内閣の時、日本は関東州、青島における阿片制度の撤廃を迫られた。この問題に対する内閣の姿勢と現地当局の対応などを、新資料に基づいて検討した。阿片制度が現地の財政に大きく寄与していること、内閣もそれを十分に配慮せざるを得なかったことなどを明らかにした。

・藤永 壮「1920年代・朝鮮の風俗営業と女性の『流通』」

近代文明の流入にともない、朝鮮在来の風俗営業が再編成される過程を検証し、とりわけ日本の支配のもとで、妓生組合が結成され、それがまた券番（検番）に改編されるという、日本型の風俗営業組織が移植されていく道筋をまず確認した。そのうえで、朝鮮の伝統社会においてはほとんど見られなかった。誘拐による人身売買の風習が19世紀末頃から出現し、1920年代に入ると伝統的家族制度の桎梏と民衆の貧困化を背景に、人身売買組織が専門化・大規模化していき、朝鮮国内のみならず満州や日本にまで人身売買「市場」が拡大していったことを『東亜日報』の記事などをもとに紹介した。

・倉橋幸彦「『娯楽』考」

北京の天橋は、清末から民国にかけて、大いに栄えた民衆の娯楽場であった。

30年代の一時期、「公衆娯楽」が提唱され、従来の大衆娯楽を規制しようという運動が起こった。中国における近代の芽生えともいえよう。そして、この運動のなかで最も不健全な娯楽場として槍玉に上がったのが天橋であった。ただこの運動はさほど進展をみるこ

ともなく、天橋は依然として繁栄を保った。ところが、その天橋も新中国が成立するや、規制が加えられるどころか、完全に解体されてしまうのであった。この間の経緯について、中国語の「娯楽 (yule)」という語の変遷を通じて考えてみた。

・村田好哉「浅草の近代文学」

浅草寺の門前町であると同時に遊里吉原を控えた浅草は、近世以降芝居・見世物小屋が立ち並ぶ興行街としての繁栄を誇っていた。浅草オペラが栄えた1920年前後に庶民の盛り場浅草は全盛期を迎えた。しかし'23年の関東大震災を契機に東京の盛り場の中心は都市文化の変容ともあいまって次第に浅草から銀座へと移行するととなった。谷崎潤一郎「鮫人」('20年)や川端康成「浅草紅団」('29年)の分析を通じて1930年前後の浅草という盛り場の光と闇についての考察を試みたい。

・原田一美「ナチズムの『反社会的分子』対策」

第三帝国において、売春婦は、浮浪者、アルコール中毒患者、労働忌避者などとともに「反社会的分子」という烙印を押され、抑圧・排除された。そこで、今年度はまず、売春婦対策に限定せず、より広く「反社会的分子」対策について調べ、この対策の思想的基盤となった優生学の普及という点で、ワイマル期とナチス期の間に連続性が見られることを明らかにした。

今後は、断絶面にも目を向け、ナチズム——「近代社会」——「反社会的分子」の排除、の関係について考察したい。

・藤原康晴「中国共産党の廃娼政策」

中国革命は、ある一部の旧勢力を味方にすることによって成功したといえる。しかし革命後、その一部の旧勢力をどのようにして撲滅させるかが、革命後の社会の大きな課題であった。私は、中国共産党の廃娼政策を考察することによって中国革命後の社会の本質を検証したいと考えている。

北京などは、解放後すぐに廃娼政策が実施されたが、上海などは、種々の原因ですぐには実施に移すことができなかった。この典型的な二つの都市に焦点を合わせながら、史料の分析を試みたい。